

周辺の
みどころ

周辺には建部大社や石山寺など著名な寺社がみられる。

瀬田唐橋の南にある雲住寺から東に上っていく道がある。この道は勢多駅家と考えられている堂ノ上遺跡の前を通り、ほどなく北に直角に折れ史跡近江国庁跡へと到る。

ここは近江一国の政治を所管する役所で、奈良時代から平安時代にかけて、この地に存在していた。

発掘調査によって瓦積み基壇をもつ前殿と後殿と、その南側左右に脇殿のあった政庁域のほか、周辺にも中路遺跡・青江遺跡・惣山遺跡・瀬田廃寺などに国庁に関連する諸施設が展開していたことが判明している。

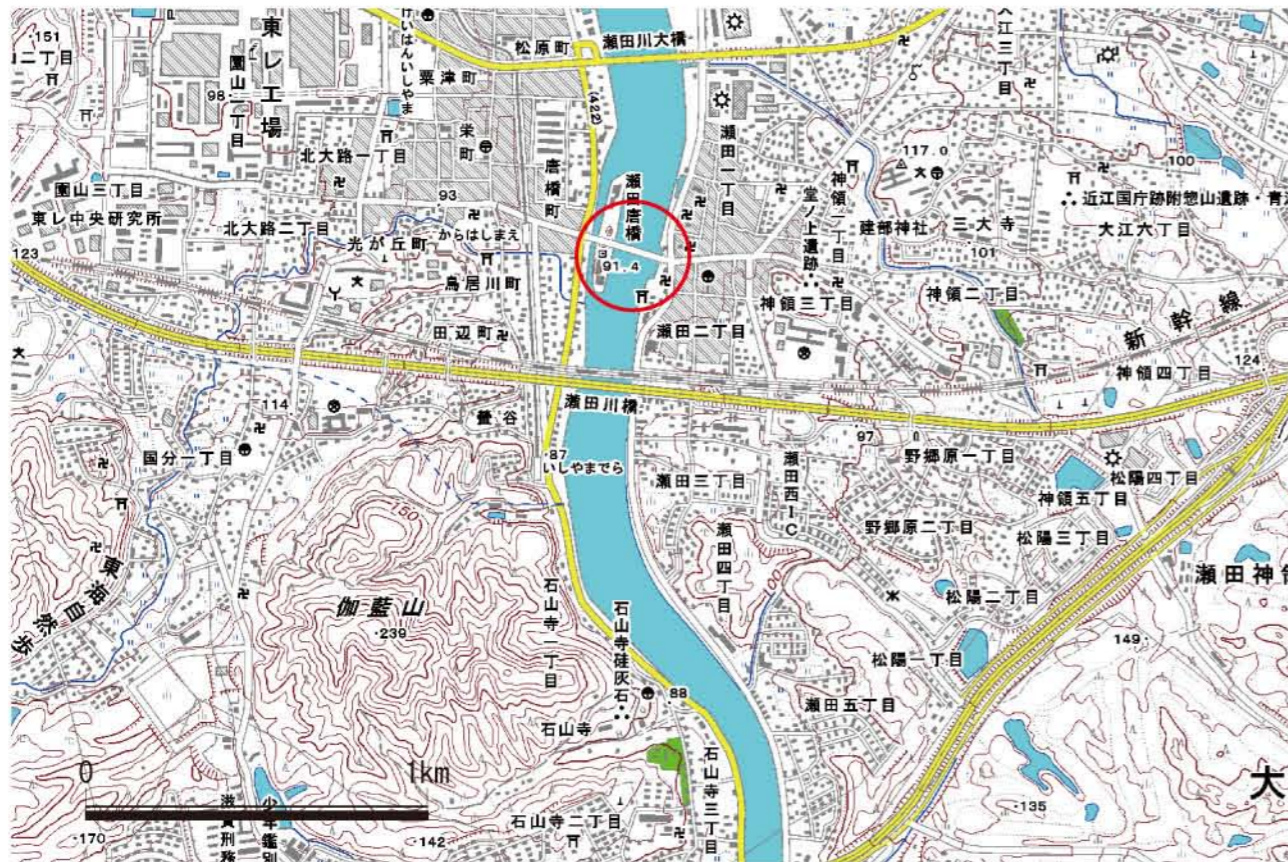
古代においては近江国の中心地であったことを考古資料は雄弁に物語っている。



近江国庁跡 休憩所



雲住寺から堂ノ上遺跡に向ってのびる道



[アクセス]

- 京阪電鉄/石山坂本線「唐橋前駅」下車 徒歩5分
- JR琵琶湖線「石山駅」下車 徒歩 10分

[もっと詳しく知りたいひとへの案内]
(関連文献/関連施設)

- 小笠原好彦編『瀬田唐橋』六興出版 平成2年

瀬田唐橋

大津市唐橋町・瀬田一丁目



瀬田唐橋

瀬田唐橋は琵琶湖・瀬田川の東西を結ぶ唯一の陸路であった。

「唐橋を制するものは天下を制する」といわれるほど京都の喉もとを握る交通・軍事の要衝であることから数多の戦乱の舞台として、藤原秀郷のムカデ退治といった民話の題材として、あるいは芭蕉らの歌・句に詠まれるなど多くの文学に登場し、近江八景の一つ「瀬田夕照」の舞台として、ことわざ「急がば回れ」も生んだ。

日本史上で他に例を見ない程に著名な水と道の交わる場所。生み出された数々のエピソードもまた水の宝である。





発掘された古代の橋脚基礎



古代の唐橋復元模型

瀬田唐橋

所在地 大津市唐橋町・瀬田一丁目

瀬田唐橋

瀬田唐橋は壬申の乱（672年）の戦場として『日本書紀』に名が見られるのを初出とする。瀬田川からは古代の橋脚遺構が発見されており、その存在が確かめられている。

数多くの文献に名前が見えるのは地名をとった「瀬田橋」。「唐橋」とは、おそらく中国風の形状からくる愛称であろうが、愛称が橋の名称となる事例は極めて少ない。

「瀬田の唐橋、唐金擬宝珠、水に浮かぶは膳所の城」と南京玉すだれの一節にも出てくるように、その存在はあまりにも著名。近江八景の一つ「瀬田夕照」の舞台としても広く知られており、橋そのものが名所であった。

瀬田唐橋をめぐる伝承

醍醐天皇の頃、瀬田唐橋に大蛇が出て往来をさまたげた。倭藤太こと藤原秀郷はこれをもとのとせずに渡って行った。すると大蛇に化身

していた龍神が現れ野洲の三上山の百足に苦しめられていると訴え、秀郷を見込んで百足退治を懇願した。

秀郷は快諾し、三上山に向かうと、三上山を七巻き半する大百足が現れた。最後の矢に唾をつけ、八幡神に祈念して射ると大百足を退治することができた。藤太は龍神からお礼として、米の尽きることのない俵などの宝物を贈られた。

また、龍神の助けで平将門の弱点を見破り、見事討ち取ることができたという。

龍神は瀬田唐橋東詰め^{からかねぎぼし}の南に祀られている。

急がば回れ

江戸時代、「瀬田へ回れば三里の回り、ござれ矢橋の舟に乗り」と、歌われたように大津・草津間は東海道で瀬田唐橋を経由する陸路より、大津・矢橋間の船便の方が早く、歩かないで済むので、利用者が多かった。矢橋からは多くの船が行き来し、その様子は近江八景の一つ「矢



唐橋の擬宝珠



唐橋のたもとにある竜宮社



湖水渡船絵図（大津市歴史博物館提供）

橋の帰帆」として、有名だった。事実、中世・近世の諸記録をみると個人的な旅の際には船を用いることが多かったことがわかる。

一方、江戸時代初期に安楽庵策伝がまとめた『醒睡笑』に室町時代の連歌師宗長の「武士のやばせの舟は早くとも急がば廻れ瀬田の長橋」という歌から急がば回れのことわざが生まれたと紹介している。

東国と京都の交通は、「湖水渡船絵図」にみ

られるように、東海道を通って琵琶湖・瀬田川を結ぶ唯一の陸路である瀬田唐橋を経由するより、矢橋・大津間の琵琶湖を船で横断する方が速いとされていたが、この航路は気象条件によって出航できないことがしばしばあった。

このため、遠回りでも確実な方法（徒歩で瀬田唐橋経由）をとった方が、一見すると楽で速い方法（船）よりも良いということなのである。